

指摘しているように、理性という人間の精神的能力を単独で取り出すことは不可能である。ある命題をわれわれが理解できたときに、「それは理性的な主張である」とか、「それは合理的である」と判断するのである。この理解の成立を分かりやすくするために〈納得〉と表現した上で、その〈納得〉の成立の条件を検討してみると、言明を出す側とそれを受け取る側のそれぞれが想定している説明の地平（問答の設定されている Milieu）が合致して、はじめてそこに〈納得〉が成立することが分かる。〈納得〉の成立には必ずしも自然科学的な正当性が必要とされるわけではなく、逆に、いかに自然科学的な主張が主張されても、その言明を受け取る側がそれを求める側と同一の地平に立っていない場合には、そこに〈納得〉が成立することはない。ここに理性と文化が相互依存関係にあることが明らかにになる。従って、人間の具体的生活において互いの〈納得〉を成立させるものとしての理性は、文化の多様性に応じて多様かつ多層的であることになる。

しかし、われわれはここで、理性が根本的に相対的なものであると主張するものではない。『宗教研究』三四五号に掲載された拙論『文明の衝突』の時代の宗教寛容論で説明した「人間の生活活動の三層構造」を一方の基盤にしつつ、同時にホルクハイマー (M. Horkheimer) がすでに六五年前に指摘した「道具的理性」という視点を活用することで、グローバリズムを典型とする現代の理性理解が、きわめて狭隘で不適切な理性理解であることを指摘したい。つまり、自然科学やその応用たる技術の世界で使用されている理性は、How という問いを

立ててそれに答えるものではあるが、人間の問いはそれに尽きるものではない。人間はむしろ本質的な問いとして What とか Why を問うものであり、そこに答えることを試みるところにこそ人間の本来的な理性の存在意義があるのではないだろうか。すでに古代ギリシアのソクラテスが自然学の探求に落胆して哲学の探求へと転向した事情と同一である。現代においても、この本質的な問いを提出することを相手側に認めず、つまり本来の理性の使用を許さずに、「道具的理性」の地平でのみ要求を突きつけて続けていることが、今、地球規模で軋轢を起こしている理由ではないのだろうか。

イタコたちの現在

—— 大和宗を中心にイタコの研究史的回顧と現状 ——

原 英子

口寄せで有名となったイタコも二〇一一年と一二年は恐山で二名、川倉で一名となり、百石の法運寺と弘前の久渡寺では誰も来なくなってしまった。大勢のイタコが来て口寄せするイタコマチの風習は過去のものとなりつつある。岩手県には視覚障害のある巫者たちが組織する宗教法人大和宗がある。本山は聖徳山大乗寺。ここでも常時活動に参加する僧侶は五、六人となっていた。大和宗を中心に研究史的回顧と問題の指摘を行いたい。

堀一郎は盲巫への関心から一九五〇年代に大和宗に言及した。その後シャーマニズム研究が盛んになり、イタコなどが注目されるなか、大和宗でも盲巫を焦点とした研究がなされてき

た。そこでは盲僧や男性信徒への関心は高くなかった。しかし宗教団体としての組織化への過程で盲僧や男性信徒たちが果たした役割をみると、大和宗としては盲巫以外の考察も重要である。今回は教団創設時期において、盲僧や男性信徒たちが果たした役割について取り上げた後、組織における男女の役割について考えていきたい。

明治維新後、盲僧の生活は困窮し、盲僧たちが復業運動をおこしたので、一八七五年に、盲僧は天台宗の教団組織を通じて統制されるようになったことが指摘されているが(加藤康昭『日本盲人社会史研究』一九七四、四七八―八二頁)、岩手県南部でも同様の状況がみられ、大原(現一関市大東町)の金野元正市は、天台宗中尊寺への復帰を懇願し、盲僧たちは、天台宗地神盲僧派として認められることになった(『大和宗の縁起並大乘寺史録』一九七二)。一九三九年になると、宗教団体法により地神盲僧派が天台宗からはずされることになり、盲僧たちは宗教結社創設へ動きだすことになった。後に大和宗初代と第二代の管長となる米倉如山(一八八六―一九六一年)と千田賢竜(一九〇五―八一年)を中心に、諸地方幹部が連合した結果、四二年に天台大和教が認可されている。千田は曹洞宗寺院で修行をした後に視力をなくし米倉の弟子となっていたので、仏教に対する知識が深く、教団設立に必要な教義・規則等の作成で大きな力となった。行政との交渉には薄衣村出身の伊藤勇雄が活躍した。伊藤は農民運動や医療組合運動の実績から村会議員を経て、当時は県会議員をしており、岩手県庁への届出の際は米倉、千田らとともに出かけている。伊藤の祖父母は盲僧・盲

巫であったことから伊藤は信徒総代をしていた。このころ資金面でも協力者が現れた。初代米倉の占いで資産をつくった千葉莊治郎の所有地が寺院敷地として提供されたのである。また仏閣となる建物を購入し移築することで寺院としての様相も整えていったのである。終戦後四九年に名称を大和宗に変更し、五年に宗教法人として認証されている。

盲僧と盲巫は夫婦である者も多いことが指摘されてきたが、大和宗でも男女の巫者が夫婦である例がみられる。習得すべき内容が男女の性で違うので、盲僧は男性の、盲巫は女性の師弟をとっていた。師匠は師弟同士の婚姻や自分の子どもと師弟の婚姻を勧めることもあった。このような師弟関係と親族関係を基盤とした小組織ごとに大和宗へと加入していたようである。

大和宗では、総本山が出す教師、権教師等の免状により、男女ともに大和宗僧侶としての資格を授けられる一方で、日常においては居住地域で、男性は占いや霊媒をする盲僧として、女性はいタコ・オガミサンといわれる盲巫としての活動を続けてきた。そうした男女で異なる系統の師弟関係をもつ僧侶たちをまとめるのが、大和宗だったのである。

大和宗は視覚障害が加入の条件にあり、長い間新たな加入者はない。近年は盲僧・盲巫たちが宗教活動を止めたとき、その道具のオシラサマや数珠等を返納する場所として、機能することが多くなっている。